遺老物語

2

老談一言記巻之二

鎌倉日下部景衡　抄集

一 相州伊豆守信綱平生の言葉に儒者と申す様にも国の政務ハ知らぬ物にて又とやかくやと事を評議して却て政務の害になるよし申されし林弘文学士春齋と申せし時ハ治りし世にありてもやう物となし神田門外に居宅給りて車四人もありけるされとも其時の酒井讃岐守ハ通鑑なと読せて学て忘れなかりし其時の子俗眼より見る時ハ不幸のやうなれと故学者の増学廣くハ此時の閑たる時にありけれハ幸の事といふへし其後酒井雅楽頭忠世にハ物せられし様に学士輩をも預りなとのうちにハ召されしかれにあるのみて雅楽頭を饗應の事ハ学士の侍食せられし

席にて加賀の清泰院殿のもとにてかく有しなと申
きしを雅楽頭業にむかひて大膳君様の御事とハ我
らなとも清泰院様と申せ殿と申さるゝ事いかゞ有
べきとありしに学士の様と申すハ俗称之殿と申して
尊崇の称にて此へ参られし人方とハ康国院殿の息
照院殿のむすめと申上ハ清泰院殿と申す何そくるし
かるべきと仰ありし時に雅楽頭殿の若伊豆殿はじめしるゐ
きゝ只今の御ことハあたり給ひぬと申されし気色よろしかり
さる故に允容学士を先退出せられて後よりしてまかりけるを
給はりしが其後に餅菓子の出し時に允容雅楽
殿へ申されていふに春斎ハ次の間に伺候仕り此御菓子を
給りて持参いたしけれやいなやとありしよし

ありしかハ学士又先に清せて餅引よせてひきさくるにあさ
たかくなられしと云物語あり雅楽頭殿の此時の言葉の末まて
豆州にハ儒を嫉と申されしといひける符合せりとされど
智計の光にて当世の人を才（サイ）略にてあなとられてとぞ果腹せ
しとハ見へざりし笑へしとのうはさなりけるとぞ

一　謙信能登攻の時畠山の八臣の内由佐長為ニ叛て九郎
右衛門ニ被囲能登ハ畠山ハ後微にして上杉上野介と云
し世上を殿と号せしハ加賀の街山といへる金沢の
辺之蓮参の家人下妻氏居住せし下妻いふと云
郎右衛門家隷之此城ニ石川口河北口あるといふ有位し
謙信此城をいせめず加賀の松任の城にて有殿まて攻られ
しく蕪木右衛門といひし者にまかされより能登へ

攻入し時能登守ハ信長へ援兵をこふて其役ハ女子
の僧なる加あそらふに外ニ役を副て差せしむ信長か
柴田羽柴を援兵ニ任らせし処安土御道中にてなふ
柴田羽柴小田へもらひし小鰻江ねるうりに首切て無てう
鯛を見せる故に如安して見せしに驚く御方の首之
如安思ふやう御方の城せめさられて能といひふハ援兵
進こなかるるすしと心得しや御方の首ニハあしハ又
さらぬ首のようしのみれかとも松任落さりし其ハ援兵ニハ
及へからす松任をくくとてもかひされとて あなたハ
加うさるようしや任しもとし交嫡男ハ素の畠山に
よしやとめよ松ハ上方旗之本為とも
一 丹羽の家ハ長秀死去の後長重ハ家督松讀なかりしよ

成田といふ家老当家ハ丹羽柴田とて信長の後一の臣
なり家ニ猶家を太閤とんを合されて不義をすす仕
勝ひなれとかく信長の御家を継さる為にてそ当家
の本意なるへけれといふ乏すの疑取して交逆の沙汰
ありて太閤より斬罪ありて知行を滅して松任へ十二万
石まてうつさる成田か後本国を渡のへきようしやとなく
成田ハ流人なひしとそや
一 井上新左衛門ハ酒井讃岐守殿之御勘定役にて有しか
私欲ありとて家刑らるへかりしに死しられハ子共ハ
所たすけて嫡子ハ玄関とて剃髪したり玄関所ハ
玄関ら関し町之 二男ハ井上左衛門とて千石をもらひ後
りて讃岐守に仕たりし或説ニ新左衛門罪の寺を知て

訖含しむることゝ也又説に台尾ニ戸化界の後土井
大牧より鞁韘の牒状を此人して廻されしとそ
一 阿部越中守殿家臣にありし人の子孫ハ大ニ家の系譜ニして
前よりて其事ニ携わる者なれハ 豊後国ニて掛よう
掛りを勤めるに付 携わり一所ニて其役目ニ
て其事ハ其の事ニ有之 在所の如く在る也
く候と云事なりとそ
一 中根宇右衛門様へ候ました時 蝦夷人酒を呑ませ
しふヨキクルミを飲ませる事 ヨキクルミとハ何の称なるを尋ぬ
判官殿を崇敬して 東来てとくハ彼等 判官殿住居し
礎いまも残りぬれは奥へ渡りたるしく 静更海と
中にも有之彼ニ石かり 河よて大海あり カラト海と

一あり 此所ニ大成葦生ひ有りて葦の上をもうつて 祖の
地へ通ふよしとかり 彼所ニ流れて漂着して 彼れる
船もなし是から之 又東ニうつロ海とふ 一種の島夷あり
蝦夷とハ仇敵の由之これとも 互ニ市を通ずるよし 彼島
より皮の類其外相市あるよしや 蝦夷の宝とする物ハ
クサキ 鍬形のおとし エモシツホ 太刀之事なり 細工之 エリ
太刀 河ニ通ふ刀 蝦夷の如見て相応之 見ゆし 我国人ニ
して尋ぬるに あるしこれを クワサキ云 女てハカエエリカ
といふよし 蝦夷人云如し たくみにして多く長
かふす頭ハ披髪ニて いうきまもカ あり 足へ傳之
一 義平十六騎 鎌田兵衛正清 後藤兵衛実基 波多野次郎
義通 佐々木源三秀義 三浦次郎 山内次郎刑部俊通

岡部六弥太忠澄　長井斎藤別当實盛　猪俣小平六則綱
熊谷次郎直實　金子十郎　平山武者季
足立右馬允　上総介廣常　関次郎　片桐小八郎

紳書
一 頼朝七騎　田代冠者信義　新谷次郎　土屋三郎
土佐坊昌俊　土肥次郎實平　岡崎義實

日
一 板倉頼母殿ハ名 鈴木孫平次が子 古内膳重昌大坂城中へ
御使ニ参りしハ十四歳の時島原へ御使ニ参りしハ五十歳
にて有し 五十一歳正月討死之重昌之如関係事宗く
名乗るにすその[illegible]江城にて鳥帽子の談を志るる
其ハ東ニといて甲の談とメる并之中
あらゆる年々[illegible]みならい先うけと志れ

日上
一 鄭芝龍接之とこし時加州の重臣し記

紳書
一 あらし蘭奢待堀出て馬ノ龍と云峯相衣の御役某
せへきすれ之知らりいれを陸てらうさ見さすとは大将ならと
感し思召れ志うしぶうしあら所禄ようは所々命ニよりて以八之も
其やりあけられ候へきとらし仰られはとよりうれハ
時うし先の御役の由者ちハ様ちうはせる大井母り根本ニ
ける上ハいさ川上んとて川上より大井田後ニ入るして道とる
木の所温ハろ桑寮とたて称寿尾と称しうり是ハ定
まりる御制のあうるかようしかうひとうふハ志るるへさ不と
川かうふ所ハ称すと云 紹鴎 四畳半ニ 天井ハ鏡天井ニ
して柱ハ角ニて合紙ニて壁を張て床ともうるては床
大き利休ニ至て丸柱を用ゐ赤土の壁ニて腰張をとし天
井をまへハあて其ハや称ふろと見てつきよとうして可

なつかしき様に目の光を清めるやうにすへしより上りあて
を付られし時も定目といふ名ハ定まりしや二畳半一
畳半のかこひにてありしそれを三畳古織にいたりて是目
の客を出す客相伴する是目といふも古法ならす
又候利休まてハ八畳にて茶立ることハなかりき古法なれと
く茶の事を用ひ古織にいたりて茶事を上けて焼きて
茶立るに彼茶子を飾らしむることを切りて捨て手段ん
あそれ焼てかえへ文庫ともつとめたり然して茶を濃に茶
の目として度とするゆへなれハ茶の湯のけの茶目をたち
て捨て手段を用ゆるなれハ茶目とハ申すまし度するとは
茶の湯を好る織田信長利休をめして茶立させられしに
茶事の稽古して新式を出して古制にかはらす候

そうしと成りけれしに古制によらさる気色遂一に其理
あるなれハ大ひにかへし候ひぬ其後豊臣大閤の時
利休をめして茶の湯の法制をよろしく伝授しあひて其ヲ
に利休か数寄流と名付け一子ふと我かものにかけれ
伝ふましきとちかへてしかれハ利休数寄流となりて其
より茶会に焼を用ひしに大閤より伝授の人々
七人ありてこれを茶の湯の七人衆と申せしその後
織田有楽を伝受し後に豊しに大閤利休に伝授せし
伝授すへきよしに有楽ハ茶の湯の制式ハ利休の伝え
細川越中守入道三斎も七人衆の内なれとこれにあれ
伝授ハ伝へさりしと見へしるのハなおよし古尾伊織ト
されしことを織田貞置の茶式ハ茶の湯をもつてしへとす

色紙なと傳ありと見えし宗祐尸せし
一金泥にて墨蹟とて細川丹後守殿にありしハ小杉門君見
宋國ハ沙弥と傳されし僧は眞蹟なるよかくれなかりし
正僕求硯要修行
日用應須悉着鞭
今得介中端的意
徧数日午打三更
佛照老僧占
一定家卿の小倉山荘の色紙ハ百人一首と色紙に一枚ふ
一首て立て障子に押されし由也後人これと五十枚
つゝ屏風に押しけりしに其ハ燒失しぬれとも亦
五十枚諸家に散在せしに其れもかしこにて燒失
して世にあるハ二三十枚なるよし其色紙もとりしハ價一首
黄金幾枚いふともやすしとなんいへるハ弥増せしなり
茶を好む人々は掛軸にして床上に揚て翫ふ事ゆへ
此色紙を茶をこのむ家にて寶とせしハむへなし
境の高家の田中なる八幡藤さしき宿の額ニ
ともなりしの家にて東奔俳して紹鷗を招かれしに
折しも秋なりけり紹鷗も好かなり露時に入て侍に
人々にいひて我かつてきゝぬ此色紙定家卿の筆にて見
の色紙八重むくらの額かゝれしと求るに家からの床
に揚られたるを見人々驚て是よ入るよしに
なりして八重むくらの額かゝり嘉納之しけるハ人々
奇異の思ひをなして此色紙をいかにもして志り給ひぬと

詠にとひしかハされハ家人と云又まきゝる人之志らるに
今集を撰しなるし庵の木陰に蔭にても露つれの
草ともをしひよせ侍らしを此中にあらしハ彼歌の心
うつりて物さひしきあうさ面之名れハ庭ふてかゝる紙
かみにけ此歌書付と志ら作らぬを以て詠らの人の仕を
のつゝる人のんまひとつにお風やしふ人に鏡しあへり
ぬ色小倉の名紙其の命に用ひし始まりとされより色紙
作れすき人のもとめてかしこにつけてもまれもやしられも
かく便も増したる之此より詠の名誉之と此侭之
さるにハ此色紙を殺へそしめあれハさとに八左藤の
歌價いや増しつゝ菜田の壁紙に書の法よたへさハ跡
ぬれ歌かきし色紙あり又世又ある色紙より猶大きさ

竪六寸弐歩　横五寸五歩之　俗に云方色紙といふものハ
紙書をして一字ツゝもたる之紙ハ料地小銀の砂子地之紙の
色とひて文字を見へ分ぬるなり之　かの凡甲紙の書やうハ古紙
ものふりの古跡を賞する故眼あり　凡世にいふ小倉の色紙と
いふハ定家卿の筆にもハ見へず　定家の書に似かよひたれと
むかしよりかくいひ傳へて世の宝とせしを後人の吟を容れ
色紙にあらずといはれし先に宗祇物語之

緝珠　一

紀州熊野奥に代々淮盛某といふ武人ありける部類と
のつゝく一村とふせり南紀流支度代々史法と傳ふ
家ありて志らくハ小松と名云ふれとし今に小松が家とそ
言ふと諸役免除まであるよし　桃原玄輔いはれし

緝珠　一

大坂珠の時職なる人ことしてすハ大変なるみの内に

たゝれふして口惜かりしやおもひけんまめやかに仰つきて
身もしとてたれもたちえはまさ物を吐て帰りけるき
此後人ゝ大臣をうけたり名をつけてうけられは終に
たりうせしよし又親家まて碁を囲て人ゝ合せしに
勝負をあらそひて刀をぬきて闘しに人ときとあつ
まりてゐたりしかハぬけ出時雪中にありし人大かたきれ
てきもありき水をまきたりけり　親鸞知識　不当内持けり
齋ノ大含生魏準　惶懼而死本体皆青て此人以為膽破とあるにもかなへ合せし
てえうり齋州永明十一年のうちえ

一　松平　実父大河内金兵衛といひし古田織部ハ横溝にかゝるつき
人ゝと大坂に対せしにて誅せられし其後大河内にいり
あるうちて莠知せられもしとりて此人其宝とてそこ
なる人ありかけぬものつらにあしとて引出て墓所

忠入ふとゝを痛ふきとうちかゝりて傍にてをとしろしなと
するく人ふれハかしこちなせしとありしと

一　慶二月九日文禄公の御に天守閣につくりし松坂ハさ如
職氏ア相世之大坂落城の時十四五歳にてありし天守閣を
淀殿ひしとつきそひてこと急なりしかハさし殺し首をきん
採ふありし　矢倉の上にて淀殿の御ふ拾てよりてさぶにふ
て秀頼の近臣や誰とハ分しに秀頼様の自害まてにとや申せし
に淀殿の自害ハ時まさなやしとてつめたちて矢倉を
下り狭間に女中ふさんとゆて天守閣を巻て矢倉
押開てとし急せし時に松坂を石垣て待ちてくりう
残りの女中も落しく石垣を下りとゞまんとせし処に淀
殿帰りきへは急ぎすと見下し　堀内にて作して落ぬ

これ成らず松坂ハ武者の道をと嗜みて兵書の
せられても御俗あるまじく死骸の出ぬ事とてぞかくて御遺
言後大名の時分蓑を着てしるしとて泉へ帰りしとかや
天寿院殿御坐させ給ひしを御前の御筆の御経を書写
なされし物を故殿へ御出でありし時松坂ちうと
ありしが我いとけなき時分大坂城中の物語りせしとき
きしいとけなきくるしくハ只今へ十人の人へ物語りと
見えて語りし城中更ニ某ぞ営作の事物語せしよし
御座あり

組珠

一 近衛殿の御礼のこと進藤長子大輔物語 伊達家にし族ハ世上をそ
おもむきいふおもし丹山後井酒井後藤氏ハ長氏の長者なる
者の近衛殿へ礼あり 加し亀山中納言の時分に宝又の美少年

ありしが政宗并 長岡泉州 柳生但州などの席にて出座の時ハ
心安く 出入ありし政宗なども少しも礼をのべてや交りあひ
久しく限りなくもつましく成て後ハ一入 眤近の事とて
いと懇なる礼またはや長岡ハ此あるの亭を造営し給ふ
せられしを 近来の大名なやけぬ其れぞれの御事
時に長岡殿ハ蔵人の頭に禁中へ出仕を属し
を為殿取次之長をしてより其奉事の日々と近衛殿御
草子を加へ給ひて下し給ひて例之又近衛殿
方のしなき給ひて豊後の局といふ如し其名東へ下りて
つかへし二位殿ゑて抱へして其比の流ある
ありし時に局いとく我ら女はかり時に近衛殿の御あわれ
をうけて己に懐妊仕りぬ我等ハいかにと成なん

ともかくもなさんとのたまふときこえ申せは梶原も佐殿の思ひ
給ひけるも それより懐妊になりたまひしかは
沈め申せしと披露して ひそかに落し申しけるに
摂津国住吉にて石上にて 産して男子なり
けるし近衛殿へ申されしに 其男子をとりつくしたまひて
給ひて成長の後実名を忠久へけり 忠久とはかの君なりし之
給てとりふし 薩摩の島津に使てなりしかは けると
たゝ給て島津は彼の所なるも申せ共実は 近衛殿の
所なるなりし 彼君の時には何とかりに一社の産土の神
をいはひてなる山はかの方なるもに 此事の度ことに来
給ありしくたるに 文長 関白もの給ふ御縁は島津の家の人に
と近衛殿ひそかに家のうくし 給ふへくとかくし

其給ふちぬとちかくまそに縁は兄とて 侍りし今は
嫡失 侍りぬる家各の家は参なる猿田の尾形とて 征伐
の家族ありて 神社へ志を通し 無事の内に密かにとく
して志を通せしなあり 何各も文を家礼なれは神
社へ志深くて 関東の時に属せし 時に二歳なるとの御
座へあつけ来し其後其家康の所へなりて 奥へおちの年
のふしひかし所方利なりしそ 某もかしく成ぬけるの
をひそかに人のなかし給ひ出へて彼なりし けるこ年近
衛殿御家をとりて後ふ将軍家へ仕へし給ふ家の所なる
とても申けて 眼近せられ 津軽はそれより六代なりし家を
衛殿の猶子なるよし 近衛殿の家の記すことあり これ近衛殿
跡族ともすゝめたまふして 彼家へ下されしきしもなたる所

狛なとゝ又有馬家にも此家礼の叶へられぬこゝたらとん
とおし譲りしとなん
樂人 左方右方の事辻伯耆守云東都の楽ハ推古の時
より始り古ハ南都にひかれて左方ハ南京ニ仕ふ右
方ハ小京ニ仕ふ左方ハ柏氏にて右方ハ多氏之を家
とし狛家数あまたかハりて多氏おひかれて世々に
其職を掌し来まつる東都の軍の時にいたりて多
氏の笙とゆへ譲ひしに多氏の人其師たるによりて我
家ニ取近して後に弟を記して東京斗ニ祗候
りて武家と成りし后仕の乱ニ及て多氏ことく兵ニ
死しけれハ其後にそれて右方の楽ハ絶より後陽成帝
の御時に右方の樂絶たることを傷思しめしての家を
継さしめんとありし故に多氏の孫にて世に出られし其狛
氏職掌をうしなはさる故に天王寺の楽人をめして
右方にくハへられけり 是より右方ハ多くハ天王寺の楽人
たり故に楽の事にいたりて左方とハ異なる事多し右
方ハ古より今に断絶なき故に其伝をうしなはさるは
又左方にハ舞のみにて代々辻伯耆守家の事にて是を道
右方ハ東儀林の両家にて其人を撰て舞の事とせる家
に老かきもけれとも狛の職を継まる人なし 左方ハ年老
ぬれハ舞の事ハ其子の跡を撰てなさしめて 老たるハ其
他の職を勤めける故 舞人みな若く年おさなき笙の少方
ハ伝中絶して天王寺より つきぬれハ多くハ二三の楽人 のみ
を笙ふきの人ぬるハ少なかりき

一 岩窪といふ所は武田二代目とて甲州信玄の孫なりとて甲州
の士流されて恭敬する者ありて知るべけれども高徳なりや其
云甲州長延寺と云は信玄の子と云者二男信玄の
孫之後河大伝馬町の時信玄の旗下の者出家す不
思儀なりとて其由を聞しれし長延寺より免されも
しきて それより疑ひなしとの事に沙汰ありて長延寺文字仏へ
流刑之者なりとて本願寺より長延寺へ請取りて寺
号を改 今は光沢寺といふて本願寺の末寺となれり
岩窪といふ所は昔三代 江戸へ呼び返されし武田の旧領に
て御免ありし

但珠

一 東本願寺 江戸の御堂は三州一向寺長教寺 浄西寺等
教寺なといふ 信心之御当代の檀那寺なれば江戸へ
移り来りて 寺地を賜て ありしに 彼の長教寺大ぶりにて費
して右儀を頼て御本願寺の手下にならんとしたり
本願寺へ申入しかし 長教寺は今は こはしく 今は長教寺
の末寺に新西寺と 浄西寺 安養院など なさるゝ右と檀那も
恭院殿の代にありて 末寺にさりて 本寺と有 信ら
本恭をも起止なり 長教寺へ新西寺ても いわれ
長教寺には長教寺を一説をさして 若へさよしなりける
長教寺大に憤りて 我寺とは 立派すして 御
ふ彼却して返さり 又西本願寺のみ 今は 長教寺と云

一 一向信徒の寺の建立を是て右儀へ願ても なり
新寺の如く蒙宗昌は信心 芦田の城を松平修理大夫へ 知行
に方合余の所せしへ 御目に付つて 大閤 大坂の城 築かせ

一 此時御留守居ハ甚役ニ立ぬるてかしこにありてあり
人と打寄て囲碁して居し処へ囲碁友の某ある時ハ
呼れにいらるゝも此某と又書面ハすましいと云此御留
守ハ此頃の作事を致しけるに御留守を立て
よろしきとして主家に帰り彼人にも乞ひて某ゆのかれ
ぬきて細工して此某事を致しけるに 貴辺方ゟ
のちへ参り出迎ひ人ありけるにされバこそかくと申こと
に日夜をくらし ありけるに当時のまゝにつき人ニあらず
たゝへ気疎ありてさりとも 時寄てあるへくされ此時ニ至て
謀ねらふへきにあらずとて刀を抜て斬て鳥居山へ参
るにてその 芦田右衛門 大井新右衛門して出立して
諸方の者にめし出されて西島ニふれる人なし 関

原此役ニ立て彼旧臣ゟ台徳公へうつたへて故之御留守居
かしあられハ今の先鋒を仰付らるへしとありしに台徳公
其思召ありしや 諸城在へ扇をつかハされて 宇津宮
此城主ニあり 信蔵在城主と渡りしにはさくに取かゝり
依之 諸城在所城代ハ山中道斗忍ひし寛永年代ニ
なりて忠正ニ依之し氏先鋒氏とて七十人ハかり 一
時ニ城主せし 其時ニ本多伊豆守太田河内守加賀守
自害ニあひしく 其後城主此城代とハなりしく 城主へハ
七名之と松平宗自害を加賀内膳といふ後芦田某をと
称す苗字芦田右衛門といふ娘は名ハ内匠といひしく是ハ
城主浪人失領なり 御留之

一 長かにたる家ニ仕其時代此老狐ありしニ要が出るなり

ならでハ手柄ハ出来あるまじとハ見えぬ手柄とみえざる
人々か州まハなしられハ行き能あつかひし時食するに
飢たりし小児人を返し枕ぐると抓のくしませしとかし
みな長の為え西国え行ハ枕飯を饋らり先にまいらせ
する大隅守代まで娘を嫁せしになかんづく十二三小児擁に
柏子水をさして池もろ役人をとどめハせて役所の役人のなすを
云ざりけるにしといへとも其時の時ハ云役に行ける例のごとく
さて楽の為方にカを得ざりとも云ふに一人ハ白髪の老
翁老人ハ十六ハかりの児小姓之此事を世の風にお急ぎ行を
ていかゞあらんとさきに此男人ハ御本の性一そ有なから
きてあると翁之御返ありといへとも此人をとゞめて本人
すめ此の上を命からしとし一族の内にまれて此家の古風

紺珠　一

まそてらし今世の風俗にあはせてハさらにへりし行をなく
次して古の御本の人まもなしく思ひかくる御本ならな
後代の御ほ後老あるましく
一 恒齋曰後奈良院震筆の和世に為きハ古とも多く此時
にある所の御所に微々として紫宸殿の御殿屋ふれて三
條の橋より内侍所の前ありしの光みえしとそ左近の橋
のもとにハ盗人の柱てあさるにて手洗例によりて手本うりし
人の為に年に一たひ天子の御手本をまるとて此時頃
本の板の和小札つけてたとへハ百人一首伊勢物語なと
いふ札付て御震に結ひつけてさしあけしと語てのちま
いれハ震筆を深てさしあさくれいかゞとい此頃ハ京中
を黒白料とて被霖も美をもいらふてあるきし手継

組珠

さも二条よふありとやいふ

一 堂上の詞といふもの如くかはり綾小路院内よりは格別のおかしと宮つくえせし出家元いはゞふるにあるふとはかりも作られ次田家出は時風葉にめされし時円侍ふやは観西堂やはと作られしとこゝ貞徳がいひしは今はみやこのみ人のまでむかしの家の人のいひしことばあとかたもなし松尾流を江のまゝこれ作る大閤の後に一変せしといふにし

組珠

一 寶蔵院寺子にて誠家の槍術中村市右衛門とうとの槍と大獻院様御流あるべきよしにて高橋左近とおよびて御前御めにはすやりと中流におゐて中村いはれざるらきなれども少も構なし中村が勝の上にいつも槍

先とあて首すじ思ふし付へし手前とりたて細仕めの時にゐるを高橋は竟にめて如して不動なるを槍と合て互に押合しに双方の槍いとも強かりしを押合ふ事能久しく久世大和守捕らへしに是れは双方おまちに申はゆるとて早ぬけよしと大國作所も見とまりしは申まで日本たるべき槍のつ〆当時市右衛門は鎗の如く見えるはよしとなり時よし仕たるも右の如きふへき事にふ異とて柳生但馬守候仕れは時出様と作りしは槍之事手きゝの世上の評判を家田のの仕れ我かとも見るゝうちに世上の評判小栗田の無丈夫者とて上意の事と守り少も動ず此時市右衛門様んと欲せば急に負け一能くて様へかしさることわてや此ありしは出下誠にむふしかし手すとすしゆゑ

絓珠

一　年礼可有之時ハ去る小笠原とて仕しに荒めり
て引罷在りて　切ぬとて　秋人を手て出せしと彼流
黨にありける者とも其人構の向ひなる所戸屋の所在處
のありけるが此ハいまた其陳りし所なるに伏し居て松
百人許りて　集れしに　此事ありて士岐に達しける　奥平
の家へ少し許りなかりしに　もちろん後に所赦ありしなり
其往ぬる所以成りや

絓珠

一　酒井周防守ハ其時酒井小平次の父之兄弟左衛門尉か二男と
此人に気遣ありとて　赤果すへきよし　書状をもとし
人あり周防守の旨なりと返事ありしと人々申て　和
と遠やしに書状をきせし　人ハ和を聴けるに周防
かりて文すける上申さ遣し者は八切役所付周防へ

絓珠

一　此段畠て　此年よりて所赦免ありて　かへりしと
松平越前守　侍部の女を甘井　大和州に嫁す　秋今望山閣の
と寺久し返るに奥方を頭せしと　此事を越州すて
文物に限ハ見事なるの家ハ牧年忘と云ることもある我
られとうハみすら其流ふ奥の通行を頭ちとある所ハ内獄
せられしこと我女の内也ありて　かへるもいりしかと但
へきとて　川端の士と　五十騎を見きりて左府の士三十
騎をかへ八十騎をしてもまへまつ事て付更し由に候
夜通とくかうて　乗しとさった所ハ難所に乗返しける
ふりふと云て　甘井の一族なりに　和泉守の方に至る所の衣
戸板を中通る夜の郎　和泉の兼も　左近守すて息甲斐
所とハ英つの佛にれハとも　かくとも　置下やとありしに

遠州大小笑て御しハ不足なりしに中ね為此女か
へさんとせし時伊豆守か身上にかへて集ひし延ひ
にかなしおとしふし候ゆゑ幸といひつ下さ
うふとて黄門は御為にならて不好ひ嫁しけるん時
に茶江守かやめられてかへされけるにまかせて八年で
恥てみるへきまゝに御に縫ゑれ玉りなりとて猶に私
とみせ大そのまゝ遠州公か勝あれハむつりとて
茶飾せしめられし其後其妻に大炊殿出生也し
て黄門より以来私と聴れさりしハ遠州の人に候とぬ
小右衛門（大炊 小名）を孫にして後々以来かくいハミ為ハ孫引さる
と以て我か私を調し面目とすへしとのたまひしに遠州か
り毎と云かへせし上て小右衛門孫たるへき理りなしといふに

遠州あれしとて孫に相ひ仍ミれり黄門ハ遠州をハめ
てありしとそ

一 松平伊豆守は深山忠識因女か妹てありてけり深山忠
病氣なりしとき夫ハ其たちさめんとて離縁して
境町の男妓てありしと奥はつまり續りて為もため
なる所にて内室めりく妹そて里へ帰りて其くらし松平
此一旗より合てもらひしより母と出す文ハ何れも来て
棄られ婦なりしひふる何返しありて御奥に遠州おとく
返小てしとあまたとも織田又右見られし田中忠直
深守に其時ハおまへといひしうり据て奥方を深山
うち門か入て表の玄関ハ元のまゝとよせて表つくり出し
めへすへきとそ了謝らり

一 むかし御参府江戸へくたりしときはたち つけはきてみえしを
くに御城へ上り せ中へあひて御対顔のときは長袴きて
ありし 第八年がめ御参府の時に烏帽子 狩衣などは妬かり
一 台徳院殿の時重を殺しけるありめつらしき事也 此刑
右元禄十四三月十六日対顔の時に
罰いふかひなきことゝ法人ともの批判に有りとぞ
きことも 手の沙汰ここゑす 此御所にいて御さすれかう
一 大猷院殿御所を始しこれより後 御移徙とて 御かすかう
此御子を御所の人々に高へさせし 御覚あらし 此小性衆
少納戸衆などいふ人々と 御前にて来春にれは安堵の
事有けるにあつて 此気色よからぬ事を度しにとよろしくなし
久世大和守申し上けるは 此御所の御心 此気色など つらうて
人の気を種々ともなし にても来年の行き所 此不審也

薬なとの度ことにもちひ給はさりしにとせうなる御医師
坂氏などの名医をめしよせられ御医師二三人はしく
有りおせしめて御療治を申さしめられ御診あるへき段
志らるへ八御側なんとも後よりするへき旨ありしを申す御
とむらう終られけるかにも其後とことのゝちに御平常
御療治の御所望しれて是迄ありしは御気色よからぬことまた
そしめされし 十日ばかりを経て 大和守又御機嫌を
うかかひてそしめしせしかと申されけれは
申されしを後あるのちは
志くはすへうかれけまても
おふせてみえても其後の事はあるましきとき 近習ハ
かしつきの衆は 御手習 御膳ことはつかさのことく

鷹師なとゝて譜代家なりしあるとは之をいふて居て
は家かる勢に因して諸局せしむるゆへあるへき器
愛しきも名高きとさこそふもいふて人々は思ひ附ふ
へきと取ありしと格別たる古例にある事し
今は大高といふたる時取立へは時は皆は高之はちふ大
高といふも大にはなられて格式ふさとられりといふ
一大猷公御鷹師に小野久内といひしは影ふる先し
給ひしもはこされと下馬より内まては供まとことと
かけられしるするしかるとお供へ御目られとのみ御
相済ありし後に世は人大坂陣といひしく酒井讃岐守
と一双はすのこといふ人之小野か死しさりし時小野吉
兵衛久内は死しさるにと請られて御成滅ありし後は
なりしは御城内まて乗物ふても参りけるとなりしよし
一内裏炎上の時禁裏御所造営の為に伊勢守を遣はし時御奏者にも
伊勢守ふ三人因して板倉周防守方へ御て申せしと此度
は四親に諸公家遠慮の後家法くらへき由ふあふまと
きこし召されて震襟を悩させられし所へ関東より御沙汰と
して御あつらへきこそ称らるしと有る事に此事
周防守たるにより人相たるへしと申さる実東に見候由へる
よろしく周防守申せしも事之三人周防守ふへ御て
此事を申ふ周防守申さる其関東は御家人たりと
いへとも父子共代京都に任りて年久しく住へは公家は
諸事大切ふなすところ勾論之まて此度は四親の事
痛と思ふ之志ありといへとも此事実東へ申さんす

いふをとかめへられは けるとゆて よろしく涙をおとし
ありけるとおほせられけれは伊勢守 此よしをきゝけるかやかて
御意あるましくと思はれしにやうらみ申せ因幡守
となりたさしんにハと定て御うらみしよし申けれは
と申す其時因幡守 伊勢守にむかひ 貞宗のすへはそなた
ちかくなしの前之 此事上まつりて内裏へつかはし
て気しせられんなる当りの貞宗の流大なるまて修る之将なり
申されけれとも たとへとりて 申すふハあらぬを人の
あやけたふん時家あると造りおしてたへとあらぬ
家の内の家もおとしく造り出して 流れといふ
やいなふへき 先業京都に年久しく作り出家さると
大切になしまいらせまするなれも 某が身として

たの様なる貞宗へ申されつはいかにとかめかひかゝることはまさんも
なとはれはかりひいひつきやうもなくて 二人帰て
けるかなひはまし 例なるはかと申山と参内しけれは
えなち彼所まて参りおかして 十日計隔て 伊勢守へ
申へきなるはよる 御参内ともないて まいらせすといひそく
ましかは 二人うちつれて ゆかりの伊勢守へむかひて 貞宗
の年ありけるなとといひそえて これへと申せしけれはらへ
貞宗は龍御前にまはす 扨其家に此度は流一と聲を思ひけれ
て 因幡殿流くら気ありまいらせんなる白論之次第には
人々かやうにいみ思ひ成る 先をみとしくて つけて存知
やうに流くらてまつらせよとの事なるへし けるか上らり修
とあらしむと 某申 修んなるかかるかへりつかれよし あかふ

申しおくしこれを又いかにもして人〻にまても
くり縁の中さるを心にかけ思ひしかといふにも
ける関東へ申かゝしたる御意とて不日に上京を
語へとは申へられとなりしに日頃相果家にかゝる
御んつきとてあつかひたれりしとなりし条にすれと
かゝるよしは此御事といひなり 伝奏の人〻取ひかへて
奏聞ありけれは上には叡感ありて御事なりしかは又其
のち伊勢守周防守方へ仰ありしに 上意にいかゝ
つかへは家の御為なるへきことにいはれなきよし仰ありてつら申され
よし先日御申されしるとなりのよし御感し玉ひ
又は其家にて存らんよしは周防守か力ありて御なりたり
へき役の者として公儀をかすめて私の功とするを御ゆるし

あるへからす此旨を先日御出京にて當年に関東へもや馬
とまりけるもの也へはかくし御申されし所之 関東より御下
しと申てまた関東の御沙汰も御座といましめて仰
されは両国との御座の衆ついには御出ちとのことありて候の所
國と伊勢守にかきしれて周防守に仰られけり此時は遠州の
守永井信濃守趣をもとて御申しの周防守是と定め
かたりある御座 その事は古き出とし御作り是にせよ
まんるに句論あり御内しめれるには何事ても同意をいたしと
あり御心は御尤の事なる事はし御大工衆と是を御屋
是にて八月費おの外に多くし申されしと有しに信濃守
事をとりて これからかしかるへき御事はいかにも
指図に墨をとりて返しける 伊勢守取さりて周防

なるにむかひて某か筆合説になるに極りぬ此度ものなる
勅なれとしに作らるゝかなへりさゝるハわかふしきなれ
指合ハ献辞を以てうつしおかれて某に頼みかけし
示されかり墨を此句したらんといひて在りしまいれ
此へさまありとて信濃守殿をさしちかへ見せんするも非理
なきに似たり不於某か心つきて此句をもひとくつへき
やう作りぬとていひおしくらん関路守も支えふもなくまして
信濃守にへきやうもなし扈ありて関路守さて八此指
合も献辞を似られし示そ作らるゝ八あまりに思ひ
定め頼ふ示いゝぬとくし理りに作りたれ共いゝふとまに
申すともさいとまり頼まうしかなし此ことにもかくも心
まかせられへしやいへきさるふらし此時何月要けるか

又ハ関東の所要用なとをなと来るの後らさることとはけしなつ
らんあとめて此事いかやといひされ頼んでなとけなし又
頼意なやりぬと作れハとてもなすにかくし要用なとも
とりあつめ後ふするの翰也なりんやうにこしらへてそ
そなへちふハんにまうそしれてといふ伊勢守此事ハ思ひあ
たり作まれし機に此まゝにゆへんするハ頼意なれいさす
示なやうにあらん語人ハいゝれとらハ此の所要用なる
翰也あらんするの罷文とをかゝりぬすさしいハなれる
とりてまそ此事やしひきゆすして以てさうハ此度指
合迄し頼りあむとて況に出て立んをせしに関路
守いやし 此度指合ハ関路守頼りまいりせん 此度指合
そるあふれ有に後しにたらんにハいそて一日をとふらず

とくとく返し給ひしこそかへすかへすもめてたき周防守か歌も
いまた詠出てとかくいふ事とハ御定侍らぬを参して
けちふあらのるなる事あらなれハそこを説てまかなく
おほせられて此内左京は右ありけれハ右ハ心附の
と逐らるへきものとはいひなれハいかるも先にかなとて
伊勢守ハ家に入り侍りぬかくて月ことに伊勢守かもと
へ役して浄要用なるいつもおくるめかれしやらん
いつとなる此ほうやうにあしましくれといひやう
なり相模守返へぬとおもへて日数経て此ちなるとに
あり信濃に侍りけとこのめ時さるハ寺にて侍らんに
あるかへ給ふれて此相模守もまうし給へともすして
いひしハ長ありけり伊勢守入りて来り信濃守もとと来

今ある事とて三人うちよりてともにさきのなかつかさの宮にし
さらハ返し給ふせけしとてかの所左衛図を入させし
絵をとり出してはこしつらけれうらみぬとて此
と見んとせしに左絵は事とハけふと詠り此時某ら
申しを以てあしほへさる事なるらんとて事とひくせて
うけとりさらるそも大なる此所をさ之某ろかさに詠りけし
うちハこそ哀なりしやひとさえ絵へうしとなへハんなる
此ぬとそ此相模守とひつきてえられ此ふと信濃守ら
一帰よ拝せし墨のあとハ露もなかりし伊勢
守もかけぬ面色して周防守も居よりて見て
此ふとの墨ハいかなるとえへハされハこそ侍らぬハいかなると
いふ周防守つらしとそ見てかけぬる事もあらなむと

たゞしハ物ともいはでやみて申しけるハ我国も
神国にて百王のまもりとなしたまふ天照大神の御孫
まであまつひつぎ絶させ給ハぬハ今の世までも
神の御神徳のいちじるしきにて今まてハよろ
づの恵にあづかりまいらせたまひ給ひしが此ごろ
これハ天神の御神代の獻事と心をうつし給ひたる
も物にいはて凡夫のけしきいちじるしきとうけたまはり
給ふて忽ち清らかにとりて思ひまいらする
まのあたりの不思儀と見すいらせ給へるハ嚴島の御
うしろめたさを思ひはかりていかで我ハ凡夫
のみを以てさうらふべき此はじめ勅にまかせよ
いかにせんとて奏すべき申されけるにそいひし給ふ

信濃守ハ首を地につけて末代にハふたゝびかゝるあ
らたなる御しるしを見まいらせる物にとかしこまり給
ひけれハ伊勢守も此よしハ御居所を拝て急内して
闕所にまうけしこと勅に命さるへきよし奏
しけれハ上にも叡感ありて仰せられしかとも伊勢守も
此上ハ辞すへきやうもなくしてぞありけるかと諸て
帰りて國務にもつきゆきて後に勢州に此御所
をさして勧請しまいらせいかにもとしたいらかにとむへき
よしもなかりしかし天照大神の御せうとやうらしよ
思ひ給ひてそのひしとおそひて御ひかりまさりとも
此国うけとりしりにちからしめしつかふ侍に柾文
をとらしかせて此国の事ともしたゝめ紙に墨

斯て池上はひやうふ東中と見めぐりて此墨ぬきて
すその綻はなすへきよしとめて墨ぬりをよく
ぬきて白ろきよとといひしかど露ふとをめて
起て墨ぬりをせてすその綻をあして白くもうさ
らむと又此墨ぬりをせよとてかれが袖口とゆをとかく
地の人ふいふましき由ちりまぜて墨ぬりをせしに此をとて
伊賀守かる縁は伊賀守桜倉ある縁をむかひて某がある
あらんかぎりをあるへあらむには志こして気れと祖父かわとき候
といひしふねるふさいの縁ひさうらめと思ひしかは
かくれさとき縁なるて周防守殿は御かうみて命いさは
えてかひしとやとさ候うとといひしと能勢惣十郎
るは書ませて申しと答へられき

一 大猷公は御菓子を陵れふ盃ありて口つき笑ひたまはく
ゆるあかりて或時御前にて御祝りにいりありけるに御気
色よからぬ御さまにめしていかさまなんらも縁に附に御縁
とへりみ返しふりの御菓子を陵れの笑ふ志とく見
すしと御覧しつけられて八の旁ふ御気色損じ拳
をつかみてあれ菓子陵れの笑ひしとみてらるやと仰
ありしより男かうまれつきなることと人よく知れる
事なれは不便なりと思ひしかはやがて見へぬきれと申
る蔵米太見てうらんと仰ありしに気も次ふ申ありて
たへ申せしとなかし程は同しく又申上れと申す
いよいよ御気色損じて其外二西三度八見てうらんと仰有
しみ気も同しく見へて申ス?たつ御縁物括して

其刀をいふせよと仰ふきて御脇ふさし　をさかせられ比
無ふかりの衣ふ主人と侍ふ出て思ひかけるるやある
くくと仰られて忍ふ召ふとて帰て出られて出しを
しかとふ主人衣ふいけるにもさりし白かるて加賀守系
れとなる塩田系りしかはあれ草かれかしてあかりつ
き切て捨よと仰ありしかは畏存すと申されしかる西
きれあけ昨日咲かれ草腰れとハいかりしや、と成ぬる
ありしハ加賀守いまた御体ニ仕と申されし切て捨よと
仰ありしふ久々切りられと申スまて十日計也ていか
るや切りつるやと仰ありしふいまた切り申とて申ス
其後又三十日計也いかるやと成たてるありしふいまた
切りかねと申すそのうちハいかるも成る敵なりしかは

命ふるもなくてありしを此世にハかくまてありし加賀守
ふりてハめくハせしとそ　松永殿も時々申されし昔人ハ
後ふ松永度を以ひし人さて其の比強き蔵ふと御
腰ふともちて御侍ハさあらぬ人ふて有りし也　安西ハ
形あり候之

一大献ふ御成被為出候ひし時長刀にて居て候ひし
苑ありてゆく　小野久内ハめさもとしてそのれか切りた
らんよいとそもつき持と以ひしかハ御気色あかりて御
きりてハいかるそとそもつきと仰ありしふ長刀を切まいハ
ぬる所ふめと申すうちふ居ハ十方たかりさる迄へ前て
二つふなれて飽しかりあまりふよく切て斬すひ付て
飛しかそありかり御気色は附によかりしとそ

一黒田家の国に騒動ありて指落し合ありけるに
刀ありし城の時を定め関せしてまて小サ刀にまき之
られけるあるの時側の侍を以て捕へとおて捕まへし腕て
押へられける時小刀ぬけて鋒か折たりいくせんともふく
退出の時例のぬく小サ刀を取り合へて色々にくり直
家老の栗山大膳か宅へ行てかくる侍り罷帰の事
承知之力なし切腹仕る此方の侍之段を下すと
いひける大膳聞て此方へまゐらしとかたりてうつ
けん大膳あつかりさはきの事仕おして段切て死しけるは
それは此方の段十分の段しかとはいふ者之をもの
思ふ事此方と如罷に志らるへきと其人も又一族之
罷りまかせらんととやしめきんとてうるかしきりまふ

其方の段切らんといふ條公儀わかしまいらせれまへにとまり
居ていかさまそ佛を持てまいて見くるしれとあらしかすいされ
て城にあやまりひとへに家にこまり居けるけるまて
大膳黒田家の家中に気を付られやと仰ありしにかかること
仕るとかくてそ申されとありしまして申すまれは篤兎
此の外にましていかにともの騒動二ろ仁騒動し右は孫の者
ありしと大膳いさきめし是にて此刀とらせて此刀かく
御さかりいかにもすつきやうやあるとらせらる右は孫つくると
見て此方刀の打ちらる虎家の方をおもはれすと覚しかり
其方いかゝやと申へは此方の刀のつくりしより出つまで公は
外にはへともかくの如く秘蔵ありし去をさうし申さんうへそ
うけたまはれは年まで右をさて是仕られおかさまれてまいらめはるん

にハ天下守つね御刀有けりといふきこえハいときこえ思ひまし
としふせしか夜一振かゝりて化出しける俄ニ織姫ハ
そらかけちたつしくさはる大猿明日引としける出仕
をいひけるをよやとえしめしけれハ参りて夕アおはは猿をミて
御刀見せ候れハかくれ申ましいふまゝに走りてゆへハ猿を斬へハ
大にまとひて見へ候ところに抜て参りてゆといふ黒田殿
いふさもありやあるへきと候ひける先に覚え入けけれとて見て
参りし所に承かたく参りけれハ氣色よけにおはしけるさて
もおもは殿に黄金三枚財彼副て引けし稽者も添へし
とてよろこひ給ひ畏てゆきて見れはものとハ彼御刀打
ある男に首代として前さきを出しけるとも申しけれハすこし
笑ひて合ひてみれハおもしろき給ひけりとて奥に入給ひけり

大膳ハ家に入りてかの男を呼よび彼男まいりハ庭に出て
參りしとおもひて白きかたひらふと衣抜て庭にさし出して来り
大膳ありしを見てといひきこえけれハ大に織とともに見ぬ気
色にていふ候ひとも某ハ死に変定してゆとやり大
膳とてゆるしなきゆゑに何のをとなく家に入りて右
何の沙汰に及ぶとものもなくしめて右方何役として参り候
開きて候を待つけしといひけれハ彼男参りけるあたりかねに
そ覚へけり此男二百石斗知行ハ給りたりとんされといふ
ところにれも物ともなくしめおはんとて申して其を頼んとせし
志ろふく候ゆへまうけ被下され任ひものにたちまちに志
たかめおとんてかかりけれハ我かもとへ志たしめて参
らせへきことてふとしくおしめて其しからり栗山ハ

かくも敏なるものなりと因幡左近殿岩元六右衛門
入道休也なと語られし

一 かの栗山大膳と云る訴し時栗山か申分理りあれとも
黒田家亡へきに定まりぬ其時台徳院様仰ありて安藤帯
刀をめして其方にまかせけるとあり老中帯刀をめして
詮議ありける時帯刀申て凡理非につきて裁断するならハ
上の御政道に背き候へし君臣父子なれハいはて理非と論せハ
栗山か罪のかるからさる由申けるその中にも理
あるによりて甚たこれを罪せんハとし果か紀伊殿とかける
うちあへて果か理あれハとて紀伊殿とつゝしみて候へとや
申されし様に栗山つゝしまれて黒田家はかへらし
台徳院様帯刀か申す所至極なりと仰ありしと

一 板倉周防守所司代勤られし時辞し申されてより一族に
いさめしかとさらに用られす一族に安藤帯刀へ異見して
辞されたる様申されて吟味いたしぬと帯刀へたのまれけれハとて
周防守へかくいはれたりといひなとに来りて何ともいはすして
帝道を叙しけれともかひなくてさて帰る時に申さるゝ
といひおくしかれハ其時帯刀辞し申さるゝ理の程ハ
ゆゑて仕候ハたゝ附勤てさゝへともはや本知ハ取りなん
なとてけしからぬ防州様にとて急ぎ承諾せられしとなん

一 寛永三年頃細川三斎江戸へ参られし時大猷院様
の御機嫌をとりてかられ候よし仰られしに御返答
ともに申されし時ハ其後は見つらひ出るやうにて候いふ
あるへきなれとも将軍様の御事ハ申すとても御心に応へても名誉

のうちもなくまのあたり見なれしるを行ふそれ清正
申されし中にもとより所とまうり出ひしかば一座はひし
内府にかりしせられし時はじめて出ひしかば大閤は大名
気つひし時ふ古しへより弓矢とりて勝負まで
ぬるまぢつれの人は為きる勿論ところしはかりハ為
ときぬ本能かとれる一度も敵かうしろを見せたしそ
つゐふ武功を立せしその其かくらくハ我一人ゆゑふりと
ぞおもふと人々いかうハ恐ゆるとありしか度々ある程の
人々まさとに御のめ前にてはしまし此名誉のなるとし
口々ふ不めやし讃りに修理様うけ玉ふ玉しせられ只今
の御のなる家康か此りん不かどは此名誉あるへきこととく家康
弓矢とりて能ふとられそとりいひしとハとかへいり給ふハ

天下の中一人ゆゑふりと御らんありいらあへきと給ふ
さりりたは時大閤家康をもせしめとて我か一度も見
為へかいひりしをいうふもやあるとありけるとき小牧の時は
すわされしを諸人かたは時をしいりやゆりんと御らん太
閤家康をも味方か京て行きかふ称ふかけまけてうしろを
敵よりんを見しる修き我ハかたきふうしろ見せてるを
見へたとのなふ家康味りう京敵ゆゑをきしふとられふ
あふの将軍ハ弱能のさを以て勝負を論し定ケ
家康つゐふ修ちと兵てつーりて武田を亡しぬさふハ
ふと味方か京一戦を以て家康かとられとハ云へき小牧の
戦よハ池田入道武蔵守父は大将とうちとられて終ふか
つるをりう一度も太閤を対し気ふせかけまける

うたしさしハ家康ニ矢向てハ諸人もそれとさとしる
覚へける御と帰りける此時分にむかうしろ姫て本意
そ出来ぬと一生の大名かまりとめとて居たる大閤
諸ニ御座なくて夜をたちて内々へ入りなと権現様
あきし御気色あしくてなる家康気にかかり合ひし
被下さてかかとまてニハ中しれをし是ニ参りあるにハ
家康ハ一生の武功ハむかしからなりける人あまりニ候
いかなる人あるまし候故ハ物なと大ニいかり候ひしる所気を
えそのもひたりしと見侍りきと三歎物語之南北朝
ニも此少将へありしかある難義ほと以之神祖内府ニなせ
られしハ慶長元年大閤薨じ諸ニハ三年から志らハ
此御備武ニハ元ニの御比なる也

一台徳院様御時天下の沙汰かしましきよし若年ニてありて御
中すそ試とて御小納戸衆にて候揖斐与右衛門祖父と
つとめる此人七十西国ニあつて年をへていまた存命なと云
されにとしと一生涯を仕へ城を守りて後隠居致しけれ
能ニ候ハヽ参りて目見ニ被召出出られ御返事不被申候へ
申せしニあれかの八我ら存命七十ニ而経たる国ニ居申候
我気と申ニいそ候へともいつかつきとてとし経り
穿鑿ありて右の様子御尋被成候揖斐より
井上筑後守へ仰られて先祖の大名又穿
鑿すへきゆきとも故ゆしく候へしとの
小條安房守大目付たりし時井上筑後入道と申されしハ最
蘇の諸ハ本邪法なりといへともきつしく人の作すへき語

あれハ是此数ニ志らぬものありし元服すると
大猷公の御代ありしか八去りしを息男あにも此事ニ付
ぬ可八去ら世給ひといひしかようして安房守も此事ニとぞ
八息男ニても云書ニと斗してる事と沙汰せしと之ま
さ能後へ召れ出し猷廟の御ニ耶蘇の法を西洋の
まして云ふあに家中の人と一人と咒ニ行ひんと八我
国の様といふし事つきあるは我国の人の様せぬ事ん
やうにその宗を攻めは攻めさせずしと仰られし美拔
ずるに杖つき居て仰られしかばその後天草にてあるす
ありきと申し後はなかりし
一安房守大目付たりし時にふるき事ありしん評定衆係
一度して沙汰文とかき出すとて某衆とくそられし時

松平伊豆守一度は人々に讀きかさして皆くいかにもと申
承ありハ中ざれ此へと有しに於申され去らずと申す
安房守只一人申者ありしか八房あいハ人なやと有し時
某の承なハ此者と御遠の事といひといひおしかり伊豆守人なか
らしさるとふにつきんハ此者と国の評定にふと此者と申さ
れずして左史にの時も多きの様ふ八人あかしといふ
安房守某人なれば承りしとてんへ向後の事ハ人なれど
申すに伊豆守人なりたるへられどいふと云ふ其時安房
守申すは某事ハ大目附の職を承りは承に於て後と也
てよし某の不及も承られ此時にハふにてしか申不
免之御是非申不ハ能あると有しかいか様にもへきと申職と
其外人なれば只ぞの御とうけありし其八某と評定衆と

日しく任ふすへき職をもて然ひぬる人もまて平定信
おもひしハ如何なる人かとなりと申す伊豆守もおなしく
又少しハ酒井雅楽頭をもていへとも房州ハ申されし所と
平日にあらしと申されてさて安房守も不承知と思はれ
しを不承知之旨と申おもしかれハつゐに其議を改めて安房守
申せしも然あらす改せられしき

紳之一

甲斐守殿ハ申せしハ老役を以て人ハ不功者にて
然ひき職掌なとを争論て記し置ふへき人を御附
なる附ふ大目付をも老役にて召かへられて其由とハ任附に
れなる人を退かせ附老役なる人ハあとふともかく存して
集りし時尼ふ召寄られしハ大目付も御役附の人なるにて
尼よりしきりてよのなかにくみては彼任しく事と存し

ことをなしし思ひ大目付は御役にてまかれしへとの事にとみては
頭とすりし老中なる御目付と尼なふれハ其御役をもちひ
て立帰りしへとの事なりと申されかりきされハ此うちの変
しまて老役なるハつかふ一言と申ふ及ひすして人を然
紀田附まりて立もりて然と存まりき
一安房守申き堀田相模守殿ハ先役にて八人に申さる
おりはれとよのはなれ人まてハおかしく残まり所存に
ふおさかれし時ハ不知まりて御役なとふ場かくれ兄人にも
恐入れといひしふ存しれ任しまする人と相手ふふられ須
いりて御役ハとみえかしまれ勤らるゝしと申されたりき
ともしふまて一生恵と存しる事といつもしく氏一言と思ひ
出すふかりいろしくしぬれハなるす人と存りとあふれまれ

おるにおいんすることあるありたいまいしめはしむへつきる
へとゆしきれき

紳書

一東照宮信長と御智を合せられ戦の首しに筧文兼一人

右五條文安房守申せし物かたりなり 紳書
紳書六四條および申申の春山條安房守物かたりの一條を

兼を御あつらせあらしに其旅するとめてしと信長ゐ
めされしハ家康かとれのかれたるのことの八猶きくかとの
招ひしと又承きて我等のとのきれとゑくあきやと
て恨申して出奔しける其四五歳中のことなり神社らく
作られしと無きしきや此ものゝ年惜しこ無れし
らハおくさやりに日本国中を横せらるへしと作られ
しと笑えしらハ我国よりうとためゝいかなる役ふら
鮮へ渡りてとりしら彼国まて欲使と戦ふ時ふまけ軍
しけるとゑて我に兵すこしあらハかくいまけまじきなと

いふを其生国へ笑えて誠にあつけしに我国の軍
法を教へて戦ひならハし時ふ立さる出て戦ふにふとふか
ちいらさして欲国の地をもとりゆしにまらかして其時
日本の朝鮮和儀ありて朝鮮の官使出武へ来り候時
駿府へ参りしに神祖彼のとのとも御覧して朝鮮の
上官の中何人めにおはしますのを見えさりしやと御尋あり
しに諸ともゑ着らへきやうもあらくれとゆしけれハ筧文兼の
めこいらなる所に彼国よりゆきてハ又来りめらえ筧の中の
ともに旅ふとるまとよそ作られし只筧の兼をも朝鮮
ゆきてゝ子の細を思ひしにはかりしるともと語りて
御機嫌よくも御機嫌能くなとゆすらハ日本よりあらし
ゆりハましけるきふふるられとほこに渋国の事思ひ出

さぬりハふしされどもすてに妻子も出来しハ今さら
て國にかへるべきにもあらずとてとゞまりしに知人の親族佐傳
内蔵助語りしと大田平丈入道某録の物語なりし
後に佐橋左源太に為禄して筑見又兵ハ水戸へ附られし其て
朝鮮へ渡りしハ佐橋か子孫にして日氏のそのち文蔵と
いへハ誤也 台徳院殿御目見ありて本田佐渡へ仰られ
しとなり 終にとそ

一 東福寺霊源院ニ湛長老御諷経のためにくだされし
れし霊源院ハ水野の家ゆかりなれバ織田信長父子の
寺なるさせられし時なりと語りし 初ニ男なく人くらば山
のうとよりて出来て住持の長老ニ対面して我ハ此乱ニ
のかれしも此之此山の内にかくれ居て斯る物なと

鐵

くだす鐵につられしハ物語らんとてまゐりて仮とまうさく
それハくるしき鏁を三尺の鐵につゝみて帰りて其みぎ
に男なく人参来てことしくにいひて住持の所へきて
此所にしくし給へとて三人の刀抜きても三尺の鐵よ
来りてさしおきしたり長老此よりも心得てとて天井の
上にあげて寺のうちにかくしおきて其後かくるも
ましし後に東国にのぼりいよいよかくしておきてぬるの
時に水野家にて財の役者と賜りてましハもとよりの
時にて危難をまぬかれし此恩を忘れざりしをいひ頼れり
其後霊源院と基院をちなみにて幸不幸ありし
つめに信向などもありて剃りてまた起られし時に住
袍を寺へこもられしにそれと葬りて揃えて今も

和泉守寄られし物とも并に書物多し長刀なとあり
其後ハ寺領十石を寄しり福山の寺渡来かゝりけるし
時ハ我もなくなりけり此人の帰を祖の参る母とあって
紫衣後を乞しけれハ清涼院殿と申す此丈こふと
そのありさまの末々となりけれし時ハ寺の下男付てう
られ山を泉涌寺の方へまかりて山科へかりて送りしと云
其長老ハ我らか五代にあたる口口長老といひしとぞ

紳書

一 南禅寺龍松院長老中井ニ水入て浄覚ときに見すしるし
とて申せしとそ語られし枚令周防守殿あって三条通を
ゆられしかいとけなき子の周防めか通るはくとといひしを
父母ならて刎しられしもいひやまれし周防守是を聞て人
を返して其親の名を問父母いかなる罪にあひぬへやと
ところ周防守殿に帰りて其人をめしよせて其子は三
条通の何某と云者の子なりけるか其子せし物おほせといひ
てそれかしつるしをて明るうれいとけなきものゝ親をめた
すハ罪ならやと思てなけきなからも余のゝおほしてたまハ
蔵に以前も何某と論目のあれハ成しして何某か借ル
銀を三貫目のかしを何某か方へくられしよると同しさへ
とり我つかしとおもわれ子の時にさるハ我あやまりて其方
にわたすのみハ蔵所したりき返済もあやまりなり其方ハ
損失とせよ三貫目の銀を其方か旗をすへきや申つれハ
立返しはくるうとてくうかくの銀三貫目めおかしてそれ
せ返しけりこれハときなき子の何かなに我かこうしてみのまへきつ
やられハ此子の参してとゞかへともわすれまゝる此よして

父母の在所をたつねけれは陸奥にありと聞てあき
ましき事なりとてしハ関路の蔵所にとめられけるといふ
ことを知りたれハとかくのをとゞめしもつれの
関路のとはいひしことも思ひのゆへせしか此人ハみつから
の名をかくして跡をかくす事なりけりし人なりしと申せし
一 又同し方先のいひしハ古にて侍る故其ハ人のありなから
ぬるといひし人之能登侍の事ハ近江の国にありしなれ
の大奥へ参る其親ハとかくしてとゞめて申しゝを候ひ
しかはとめられし之彼の子十四才にて奥に参りしかハ
稲葉の良清か妹板倉の市正と申して熊野の子となりしや
成人之後奥へ参りしハ親の名をいひし之事ありと申し候て
いふ板倉ハ熊野にゆかりある故之板倉弟の父母共に此

すゑ入の後其子孫かめして是ハ力なく参りしは此後の子ハ
此今の所志とハいひ申遣しのちとて之の移直ゆて市正夜能
登へ参申しにハ居つまりしによりめしは物を借りいふと
ゐる所なるへき能めしなとめしハ十五才の時まても三十之比
参りせし候ての後めてたき父母のもとに参りしは在所へハ所経
とゞめも先人を見たる所と申されしゆへに稲葉に二
とひ立るもかゝりしとそ
一 丙申の冬薩摩六七度又遠江国之役又与て駿河より此所へう
つりし比にその駿河の者の駿河の在所のことをかけり
かりて駿河国をいふ人その比より江戸川といひてその龍
桟の名の川東へ流て平川ヲ為合なり其江戸并の其の
古き所ゆかしくいひて人のより則平川の名これとうつる

しかるを後に文彦丈より文箱しかと地蔵へ入りて少しもさ
それよそこそ流の古川へ落入んと する節ハ只今の因縁
綾瀬ある舟ぞの屋敷へそれから内へ因縁やしきに多地あり
是を此の川筋の名のなり其所の露のかりしと也
一 さて台地に此あたりせあたりしとて此あたりの時に此あたりに
云人えんさて此あたりよりそれよあたりに至て来りしと古井
大坂屋の主人にて此ハ当家きてハあまりをさかいへあし
答しハ此当家を御もれしてうち明て参てハ必ず
此志ありに道して我あとより参られよとすへき
いふあとにあとにつきて其所に露をせられて此気色
よりし時にわかきものの此露の露とりゆるつかぬ
見ねとて此あとにつきて参りて此とかせれしハ此後

しても深くなるにいいまして見えしかるハあけしと此気ひろまれた
まといふ今の猿楽町といふハ観世太夫か屋敷ありて
其あたりのかたしあつりさきてその綾瀬川へ引うつるにあれてふる
おもしろから屋敷の場と此所へかり付けてここ土手ハ
お堤とつられて因の此陽かよてこそるかと綾瀬と名
付たりさて後に又陸奥守屋とる付ていふそその場を深く
せられしよし観世屋しきに此所へ引うつりて屋敷に据りて
猿楽町の名を残りといふ某聞にさては牛込の者
の場も其時におあしやと聞ゆる牛込あの場のハ未の
おふれ龍慶橋の川を江戸川といひし古川へ落合と
ふききて 綾瀬川へ落るハあたりいふあとし残りたりとも
細書 一 むかしの連歌師の兼載ト土俗のいふ伝へ所ハ奥の

會津の猪苗代といふ所の北のかたに鹿方村といふありこゝの
所のものゝ熊野と申しかんしけるをあかめしとて勧請せし
天神の社こゝにあり 湖水のほとりにみえし一本の松あるかたのこ
村の奥の下の世にさきもめてかんなくきめありけりいかなる世に
所やありけんの天神を信仰ふかくして常にいとあはれ
こひけるハ借川ある年の空中に奥の地にふれハおとに空
ぬかき中に社頭の梅の実をひらひしとみえて一つハみ
はらふこれをくふに一つハその主人にまいらせて人
こふかしてたゝむすめありて一人の男子とうむ二三歳
の比より学ひすして物かき歌よむ事ありそのゝち所
よつきて天下に名をあらはせし連歌兼載なり今ハ
こゝの天神の社所の旅をとしあかめまつることなりと云

此国のえひすさへとふとくいかめしく和哥のめてたし
とふかぬ事のなかりしと黒澤勘右丈 酉六月十七日語り
しるす

一 小瀬復菴 順元 云三十年ハかり以前に加州へ参りし時に云
六十ハかりの老僧来り加州城下の犀川と今一つの川二すじ
川の東西へ流れしを見てむかしハこの南へ流れしか
こハ流れさりしをいかなるゆへにか起りて城下の春日山と云
ところにこの山にて義経を留め酒宴せしをおそろし
怪のあるにの関より流を返ひその鎧の此山にて酒宴
されき書物かきしハ判官主従十二人のほかに山伏にて通られ
しといふをあとかたもなきことくその時さらにすてさられし
かし百五十人斗の人数にてありしといひき 此残月と云

とみ侍居をもふく居ぬは越後の田中といふ者のむすめ
りに一宮をつくりて小松宗室といふ六十斗のとしの因
者して或鼓を絶ちて久しき松勝を炷て服餅一寸
二人ともにいかなる女性も志し雅にもみにいひ出しも
いひ傳へし松ハ残月ハ岸陰坊海尊小松宗ハ亀井六郎
といひしものゝといふむかしの事をへハとらへすなれはものゝ
されんねて義経といふ事をも續てよりかくあらとい
へきんねすして此事をよそにすることハひらるまゝそれるかく
かそあり侍れといひて覚へし一家のもともといひかす
ることもあるをとやすこし松扇を煉る法ホハ今事に見へし也
されこたりと侍といふ

紳書 一又順元いふ加州の家人其代藤人の先祖其代の人を云

ハ青地駿河守が子也此門は名高き時は夢に朝鮮ニ
渡りしことを屢々見てめつらしきることとも覚けるて
みちみつから年山海の容を見しやうにうつして枕屏風と
なしより十年ハかり後に朝鮮人の始りて来て其代も
彼国へ趣くすからめつらしきることなりれと覚書
見し者に似たるもやある猶ためと其の屏風の
絵を開かせて見しに少しもたかふ所なしとて
よろいかなとそきなハ川あるすしとおもへハ川あり又は社
ありて山あるすしと思ふ山ありむかし夢見しことより見る所なし
大小利をなしすこともありし或は其夢見之といふハ
其代の家に其図やあるかとて今はいかにやなりけんその
家と見えしき物ハなしといふ

○三月十五日宝滄浪ハいひしハ

紳書 一 小松中納言殿清泰院様へ茶奉行と久しく出しに丈
に八とうせうかけしかしらんと申されしに筑前殿に
ちふれまいらせしよりはうつあふたきものふとのうす心ありと
うかひいてはハそれぬる今ハ絶えてはと思ひよさせ給し
小中納言殿御出てあやまりと存しはぬと申されしあちれを
かへさき成ぞえりとそ

紳書 一 むかし出入しうちまれとさるれハ宝滄浪にたつねしうらて
すきし之関ヶ原戦ありし後濱田氏大子と八丈へ流されしに
及て中納言殿息男八郎の乳母ハ召せらりとさしよひ
て乳を参らせし女のかたにありしうちのかうと抱きて中納言
の室の余にともせし所へゆきて我ハ乳子の御供し近し
けるとハ暁ゐにありてさへしきるといひすてハ姫の御

と逃てやうて追付て後せんといひしとちゆかうかうかうかしを
いかうかきてつうるに大御所の御猶に重ねせしにあられて後そ
ゆるさ給ひしらハ悦ひてうるわらいにてうちにもむきた
りうら中納言殿の室ハ加賀利家の姫にて候ふにとりし
て家にとをしう我かのうらおね様宜しまのふれいいとうと
そうそうられしとかふとみえうとをてせうゆうかひて人
とふてしらはみえてとをし中納言の行にめしつらひ
徒かへさうしとやうされしうにやうてりうかしして津橋
世にとて見りてうるわのふとしふかりてはるる丈か
加賀の殿ふとなりて俵を振て一心様とふつくてはなれハ之歳にして
母にありてなかれてたの御動なとも見へ候をく女ハ乳母の死所なて候い
うふうしかりあむとるうかのとかけうちかうに心やさくて

あるべきいろなとして一度母の意をとみてさてはゆめされど
これらの子の大事に歎きしさんまも猶くるなれにすして
はるかにましてとかひしらは傍とあらて物をもよみかき習
ひしかとふ猶くへも難義なるわかにゆしみを成るるかして
台徳院殿御上洛ありて二條の城にかしこを請人とし給
ひし時に久安の中よりもえり出て一封の書を捧げ奉り
尋ぬれバかゝるまのとハ云示にまりてすへきことをとし御依
の人々すでに許させむとすゝるを当家の身の上たるらんを
仰られしかははやそのまへりそれをさげし書とは伊豫
の国へめされてこの由を承り後に前田大和守の傍に
して名高き親にられたる関東へわりし日のかの時なめし
をたすとはかりしかバ大和守の傍をくらしてあらその歎き

申すハ己とも配所へつかはさるゝ事をきゝて其けれは如何ならハが
あふましさるの事いかなるを思ひてまりまへと仰ありけれしかが
くまて歎申すまのか事不けるかいひけるはいかにとていかなる世にハ止
まりけへきとと申切りてかれハさらに母をめし返されて対
面させさせ給ひてしと仰ありけれあるまかゝき浄なりけるは
仰られしも某が家の時なるにすてゝはひしものゝ
御代なれはかゝるさまは人をもて政道をなさるへきとやせし
かと既に母の事ともなりたる由を仰ありけるよし業はせしとて我を
見ては物ハさまて人の情しはひし時にさまに世にありきも
のとをもしひかしてはひはりて情ある事に成てたる人を見捨て我
なる逢へきをなに孝有るなれのべき事有るならハ何としてか是は恥
候と申したまはりしきみと母を申せて参りて父はよしと申給

わかれて後の歎き申すに及ばず御役所ハかゝる事に付て
次第しらせ母も共に急ぎ来ス此上ハ只ともにまかり
ぬべしと覚悟せしむ其時申すべき事こそあらん母ハ申すに
つきてまつしく暮らす事なしとかく泣きくらしさまつて此
上ハ母の面をミんなとて思ふ心へつらく候さらにハ母の命の程
心やすくして日をも送りけるに其時帰さるゝ何んのハ覚え
さぬるを悦しと申す事を思ひあらハかハ申すとて
仰せられし所にいふ者ハ加賀中納言殿のたのみにハ来
さしき堺にて仰せられしよりして加賀よりハ年毎に
いふ者に扶持のあるをゆるし置かるゝ十と申すれハやかて
て中納言殿の許より其由仰せ出されけり中納言殿
しらてありぬと思ひてそれよりして年々に

金子銀子の其外の物の数多く送る事共送りに
送りけるにまた其上ハ此の様の人に後の物送り
送るハ此一人娘の事なれハ手紙にて送りて一心坊ハ
いたましく思ひて心の内に悲しミ侍りしと仰せられ
されハ当時の大名衆もしとめしより何んといふも
家ハよし其身の事もといひていふへきとて加賀の
中納言の御許へ御返ス思ひしとあらはして彼家の事ハ隠し
申へきにあらねと此の事を聞かしめて表ハ何もなくての
様を語りける処の事なれと妻よりもひとり
も我らてさへいふ故もありていにしへて
後も語りける母ありしかハ其子とありけれと共に
恩愛のあさけの其の故つ入りぬれハ我等もまた

すてゝこれより八坊これより後の世にハありがたかるべき
事ハ台徳院殿の御事にてぞありける、されども没後に去冊の
御娘と成らせられしこれぞまことに鰥寡孤独とさまにしまふを
いふなるべきかくまへられとかくるの事とハ世にためしなきも
なきことなるなりいふなるや

紳書

一 小瀬復庵ハ又の名を寂也に津西の醫師にて名高き人なりし
事あり霧露時分に土用をあけ西瓜あるを方剤
志るゝしなく手料を用きして渡りしに薬のことく
皆之始めにとありしにハ不撰會西瓜数日を続せしむるに
手段なしこの醫師識にありしへき業ありて一人にまず
業をあるにあふ去りところに志るしはからふとかくてこれ
他方のことにあるにおいてし皆手功ありこれを

とて秀頼謙之をなしてすでに陣中にて葬をかねるなる
なりと云きれより御わ大坂の家中皆ゝ秀頼成之病
いゆることをけるとなり

一 丁酉十月八日に谷来りし時に語りしハ谷もち出づ堺小西宗恵
といひし人の弟ハ九歳とまて茶湯の名を得しものなり
太閤なとを東照宮なとをしめされし物をとり持の家に
なとを太閤より請し道德あり蒔黄の金織物にとひ
ならうちまゝ陣八かし入りしを東照宮より請し所の
胴衣のすなハち紫色ひやをこハにひなの中に人へ伝り御紗
なるにこれも見ひなる袋之錦かし入りたるの製とハ
かはりて袖ハ二つなるから一寸しまうて四角なるかしく丸り
なへて袖口を狭し胸紐袋のきられを以てくけひろなり

此者ハ東照宮の御とかめ有りて西洋へわたりてきりし
たんの流となりて法を習ふこと三年の後ふ帰りて其法
のとも つまびらかにかたらしなりて其教の正しからぬ
事ハさとりて明らかに顕たり 初西洋ふ有りし時ふ御、
よりて其法とかかへきためふ其国ふ有りしなり
先宝ハ其徒ふあらぬよしの所説状と申侍ふてゆき
しとそ 今も其の説状ハ諸所ニ残りぬれハよの中ハ切死
丹の宗ふとゆかりの 例ニあらず

一 又云堺ニ宿屋町と云有之れハむかしハ今の旅籠町なと也
其のむかし往来の旅人とゝめし所ときこゆ 其所ニ津田
宗及と云ものあり 茶の湯の名人にしてその比大閤ふ召
かゝれしていとなみて其事なふなりを業とせしかとて

すゝめて剃髪させしかハ利休と申て茶をせられ後ニ
いひのこし 利休なり 其宗及ハ大徳寺の江月和尚の父
なり 清医師の半井卜養ハ其家ニハ外祖なりと云れけり
孫と相為ふ 堺ふ住けり

一 又小西摂津守か父も薬を以ひしも堺の薬売りし物之云れけり
日比のものも其子孫今ニあり皆ゝ剃髪の後ハ法師の号
をとりて名とす 摂津守か家ものの木戸の名と呼れし
堺の町人ニて其日比の薬の子孫今ハ富有の町人と侍り

一 三月十六日ニ 清ノ法印度西館ふ大猷院殿の御所ニ御實子
なりしんニハ御を立ましまして御られし後ニ 菩提の
為ニ茶をなし舎身二人ありしを嗣とすへきやうニて後に
命ありしを奉る人の後ニおいハ二人の舎身ふ其義礼

て五千石を千石とて残りの分ハいくらもなくして松平周防守
がある事ハ絶たまへハ依様をとめし出されぬ義を以て一万
石残りてこれらに遣り給ひしかバ又ゆるし此代がたくよ
去年残すたてらる事など御嘉されしと故老が申せしとぞ
まて此松平家の依様きる事ハ御恩儀がとりけき我等か菩提寺が
月桂寺ハ此人が為にも菩提寺とそいわれけるかとなん又千
年が后よりとらも百年が忌日とらいふ事とて月桂寺にて
法會を修せれたりけき その時に家老又ある二人朱雀を云
もの譜代の家人二人彼是五人殉ぜし事おほくありし
其事ハ朱雀をといふものも二人そしておめられて給しと
家老ある人の申ハ後の法会ともなふ比ハ此免ありて召出されし
ゆへうしといひしとかる御なきる申すものなりとぞ

さて八殉を切りいへとする者が殿に腹をといそれしとは来り
ぬと申して為をとら為よるによりて其係をかくれ御や此上ハ
力ふしと誤りてみつから腹をきりけり二人がことも重代
が譜代がせんすぶし又がかくれ参りおもてえそあとらのこりて
他家にいたし此もとやるきもよしといひて二人さし違ひ
て同し枕に死するのとしらなくて残し二人とこれととて
て我か夜に父子二人死せしと家の似が面があって世
ふかくへさといひてかくかく腹切て死すこれより八月十
五日にて自らみとそ月桂寺において法事申して時ていひき
さるほどに常憲院殿御所すとも定めしてのうへ依様をハ礼にもと
ときみつからとそ面影めしきなくれてある人々ます
を残りたりこれか依様をもきるがあらしと去殉が子

と云しがふよりて又此なる事あり是も親類の者ハ松
平紀伊守が女なりしが此人丹波に居られし時依様
もいまだ存生之いますりしが一時にかくハありし事不思議な
りしことなり

一 小沢蘆庵が筆の事 藏人といふ西国の者が杜家所領の
者京江戸にて彼是持ちて賣り廣めり両方と云
聞えし

ますら男は玉をも中々に棒ちひくふ 廉ありて又えて
と読みて清水谷に見せしを清水谷 此うひかふその歌も
見えずされと漢摸しかりかふその事ハ堂上方へ漢摸ぜしじ
といはれしにいづくなりやふん 人を地下の歌とも流傍
しかふとあれハうけられずといふ 清水谷 硯をとりて

よき鳥の紙になるまでとうるしして封して蘆庵に見せし
に取りてよく案じても見よなさけあれ よみ改めさせそ すぐれ
たる時に此封をひらき見せんといひて 近くあるものにその
封せしものとめつけられけり 蘆庵旅宿に入りて中一
りとさきて案じかへても よく読ミかへし作りぬかねぞの
作ハかりし物と倒れわろくちまよみ 模じたりとハ後に他
といふ作らバ此旭封せし物をひらき見せよとて 歌されしとみ
きバ棒ちとたつつちと改め直れくりまでるも甲斐て之
つまでて無あるまの 棒ちあり此先んつあると いひれて蘆
庵を騒がせて とかしきることにとしかし あまりに棒ちたちぬ
るまて ふるれど御たさるどの 苦まては 中々も戻らんや居
しきるなし 此蘆庵東国へ下る時 富士の山頂にとりて

富士の根に居れハ雲をさきの枕に頭を並へ臥る心ちし
と讃て京へ帰りて近衛の太閤へ見せまいらせし時よき
歌つらねまいらせしハ都ぶりならんにハ透遥の作な
るべしとの御けしきにて御代よりよき歌人の冨士の絶頂へ
登りしや能とや申にや太閤もさまざまと感ありて御誉たり
ようごとに此まで末ハ浄人透遥と申て富士嶽にのぼりし
男之大かた名山を歴廻し男之

一 同春乙亥三月河村家遊物語りに台徳院殿御出陰の時御小
納戸三宅夜な夜ないふあり物語りするに見ぬ人之大徳院様か
御書なされし御印判ありけるに三宅妻より文とあやしと
一つよくしてそれとよりわけるなどするもありしにある人
三宅か所見のよきを見ねて大徳院様の御せひのふき見れ

かとやせしるまで咲有年して帰る作らぬさまり新しくなりけり
それからに三人ありしを会津の出より仕官よりも出を之
家来次男家名なかりて何某之男熊谷なにがし後之場
田筑前守殿にありし熊谷なにがしの父なりしといふ我名を
也し左衛門武部利直のなかいしるを我ハなきに時に少しは
三宅ハ所ぐしてあけしく人まて所見よかりし也我ハ古所所縁
貴となりけるて縁多の所縁の家の縁なし所くしてと出仕
らるると所縁をともありし之御次より見ゆる所に黒漆の二
枚戸ありて所ぐし出しし人とて語りて所前を見ぬるにはこ
まよへお来る縁の縁の戸よりうつりぬるを見てとなる来る縁の
見へしかハ御膳の手お気をさむとするもなくして物書の
するべしこハいかなると思ひつかねて作るもあやしかる土井

故大炊頭の御家にありしころ御次へ出て三宅何智にあて
御目付なされしやといひき人々あきれてかの人にとひてハ
さわらの罪あるを仕舞する事とかしこき大かたの
なりしかいかなる事かあるへきにもあらん何ゆゑにといふ程に
後に聞ハ不忠の至極也大御番頭倉橋何とかにせられし御文
箱のなかにあるをひらきて見てうれふるとするにそれ
ことを所望し捨られて御いましめにあひき男也と
覚れ共あへていふ也此男ハ越国の大身の人にて乞名をも
見しらぬ程の人なりしか此表家を棄るとて御所にて文
箱のあきて見るをとりてそのうちにれとも
返しえて箱を納めてそのことにくをはひて手紙を
偽らんとしたるとみへたりと申す又か密しる従仰てすこし

見ていつれのかたへきんといしも我等の
あたりなりしにハあやす人従ふ覚なれハ難く只いかると
あれ御みつからきり殺されのひし人の子息三人ありと
思ひてありしとハこれのなりまへきにも思ひしにこれハまこと
ありかへきなりし

紳書一

日九月ころに雪の加州の山中温泉にいひしハ菊池十兵衛語り
しハ久世手かといへるものの祖母なりしなりある時祖母ハ元
大坂の淀屋に仕へて後に淀殿の大御所にもちゐられし仕
へたりしに大御所他界の時その祖母御菓とまいらせんと
て所望をを当にて来てある辞をとまいる
母のあるよう来るにの祖母にいひしハおまへハ疎れしなと
いふと見れハ淀屋なりそのもとハ忍しのひしにまいひ

やられいや只今の菓子まいらせよとて申せし母ハ祖母
たりと語ありしに奥にて帯を帰らめし今ハ捌ハ
うせさせ給ひし男とあととうりへり元さえて見えけり
たりしに浪花ハ兄へ給ひて出きしく見まいらせたりし
ふるさとにて祖母が語りしを覚えたと咲しと十二歳か
ころしと云れ山田源太郎が咲しとて語りし由旭菓子
いひしや
さて久世が祖母は十六歳にて嫁入りし時ハ此菊地とよはれしを今ハ木源太郎が母也今木
大坂にて加賀へ仕へて浅井と名のりし母ハ菊地氏家に養ハれしより久世か
祖母大坂より来し時今木といふ家にありしかとて今木がありつかいに嫁入へ

一 小瀬復庵此年九月来たりし時は加州小笠小幡播磨といひし
おなじ時小幡が母かはりに嫁をとむらひの後ニ祖母は立寄しやそのること
人ありて下女に菓子といひし事ありしを数せり是れハ後の事也
語りありて其時小幡きちきと作ありてめしつれ儒子此神ありし此羽織と
計のありしと昨の夜や菓子に今日そていひしハ此金銭
ぬきてありしてならとを借りあいしとかかへて候ハ祖母ハ十六にて
ちりさろうるにとあげずちりさせて数ささせとしそうう
かゝりしといふなり
めしける兄弟へ播磨がありあるべき人とものともさか

小幡か家にて絶えて後ハ武蔵あるいはゆうりある
ふるものをするかしてひたと語りしてありそうものかたる
ありし後にも家質内緒といひしものをするも浮世にありとも
し後に内緒なるに委きといひて奥山に住てありしとの
江戸人給ひ来りて上野名にある地にして奥山に夜へ参りし
遠ひて居る所へ行きし人皆来りて手をなさけ後に半年
嫁出して其ほかにきし後の親類なとも大守へ行
ましてある夜に来りありて居る馬子いさめて来り
駄賃て給ひことはいたすと云ハそれに来りし人の気ありし
馬なりとりとといへハ女で一人のみ来りしといへはず
かゝれ云ゝいさせる人にて女子とあるもあくいろにかへす

とハいふそとゝくさ我ときこえすなるといひて此外とまうすてや
さりとてハあしぬすといふ人てなとあふさふなれまの表
の門とハいふましきに入事ありしかや門よりしてよの門に
人此事なとハ告事なるそのなるもなき得んなすとてハ心
ては知るもなく入事かりきら後とならむ人もなかりしとて云
更にかなきてとなしくつゝふそのこれときこえ侍て
又て御此老此事ありしく力なくしとかいへともうちなくらば
といひて價とらせそけて門へつれけて返すしと云し
只今迄しらりそれ此ふゝの高さ此入事あらとハいらそきなる之
甚あらせすしてかうれしとやへてつれ高人ナれハそも皆く
つかやきしるし不思儀此ゆえしいなる門よりやへぬらんと
いひしまさそふてより入ありしと いひしるすそ 後しも忍

せ後とりすらくいひおもたらひれためきへなれとそいふ
とあらなりてなとなく更に後も死しらう波栗の来りしと
こそしえ何すかあようきるの後とるとかりて来りしいと
あやしきことなりと語れり其ふよきこるすしよの事申生
此屋の車馬ふのりしこと申生てそハ何ぶか車馬とも龜魄や
あるへき人何ぬるすとと古人此いひしるあり理りあるると
ともひしらそれ申生此車馬とすふたちち波るなるぬことく
まことの車馬といふらのふよりてしかり思ひてそれと申
生此龜此なりまふふすしるとてるをまことよりつるとる
ふならるの門と入しハ高人此人もとかあぬ竟又ふ思儀也
既ニ母此君ふ不ニ入りし後ふハるもてるもありし誰此
るとまるとなりし それ又後ふ此こえとやふさそ又後巻云

ともなはゆかりのものあるかゆゑ凡そは蒔絵にそれも添し
ものそれも繍しさるものまでも象な形のあるものとみるを
いふなるや及ふ絵を画てそれも其まゝ此ものあるとせ
あるに覚へてうるさしまたましてやまことの象な花など
おひもよしめるくんはめるくしといひき


H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002